



ルー
テル

藤が丘だより

発行 月報委員会

発行日 2020年5月3日

No. 72

話し合い論じ合っていると、イエス御自身が近づいて来て、
一緒に歩き始められた。しかし、二人の目は遮られていて、
イエスだとは分からなかった。

ルカによる福音書 24章15-16節



礼拝献花より

御言葉に生きる

御言葉はあなたのごく近くにあり、あなたの口と心にあるのだから、それを行うことができる。

申命記 30章 14節

ルーター派キリスト教会 日本福音ルーテル藤が丘教会 牧師 佐藤和宏
〒227-0043 横浜市青葉区藤が丘 2-31-21 tel 045-973-2729/ fax 045-439-7009
URL:<https://www.jelc-fujigaoka.org/> mailto: fujigaoka@jelc.or.jp



シリーズ説教

『日常の神さま』

牧師 佐藤和宏

ルカ24章13節～35節

もう十数年前のことになりますが、アメリカの青年伝道の専門家にインタビューする機会がありました。この人が言われたことで、印象的なことがありました。それは青年伝道をする側に求められているのは、エマオへの途上の場面で、主イエスがされた行動であると「言われていたことでした。今日の日課における主イエスの次のような行動になります。『近づき』、「一緒に歩き始め」、「彼らの語ることを聞き」、「聖書を教え」、「一緒に食事をし」、「そして消える。」

同じように復活の主は、私たちに近づき、一緒に歩き始め、私たちが何気に口にするのにさえ耳を傾け、御言葉を教え、共に食事をされる。そして消えるのです。私たちが主イエスを捜し求めるから出会ったのではなく、主自ら、私たちに近づき、一緒に歩き始めるほど、私たちに寄り添ってくださるのです。そして、私たちの声を聞き、

たとえその多くが人間的な誤解に過ぎないとしても、じっと耳を傾けてくださる主なのです。そして、神の御心がわからない私たちに聖書を教え、一緒に食事をするほど、親しい交わりをもってくださいる主なのです。私たちの目には、今見えないのですが、確かにこの主は共におられる私たちの主なのです。私たちが、うまくいくときはもちろん、嘆くときにも悲しみに打ちひしがれるときにも、主は共におられるのです。

私たちは今、大きな困難の中におかれています。先が見えず、いつになれば終息するのかわからない状況に、不安は募るばかりです。そのような私たちに今日の福音の日課で、二人の弟子たちの「目が遮られて」いて、一緒に歩き出したのがイエスだとわからなかったと示されているのは、救いなのではないかと思うのです。なぜなら、今私たちの目も同じように遮られているからです。大きな困難の中で、家に閉じこもっている私たちは、テレビから大量の情報を得て、かえって不安を大きくしていると言えるでしょう。また、不安が大きくなればなるほど、そこに神を見失ってしまう私たちがいる

のです。／私たちの目は今、「遮られている」のです。今このような困難によって、私たちの目が「遮られている」

のは、主がおられないからでは決してなく、私たちに見えない、わからないだけなのです。これが今日、聖書が私たちに告げていることなのです。そして、私たちの目を「遮って」いるのは、私たちの罪の結果なのではなく、神ご自身というのであるのですから、そこに、すなわち私たちが今見えない、わからないということに、神の御心があるということなのです。そして、二人の弟子たちの目が神によって遮られていたのは、神によって目が再び開かれ、復活の主イエスがわかるようになるためでした。同じように、今私たちの目が遮られているのは、大きな困難に目が奪われ、恐れる私たちに、近づき、一緒に歩き始めておられる主、復活の主が再び見えるようになるためなのです

最後にある言葉をご紹介したいと思います。以前の教会の集会室の壁に、次のように書かれた木の板が掲げられていたのを思い出したのです。

「キリストはわが家の主、食卓の見

えざる賓客、あらゆる会話の、沈黙せる傾聴者なり」。

今私たちは、この大きな困難の中で、礼拝に集められ、親しい交わりの中に置かれることが遮られています。大きな不安の中で恐れています。ですから、私たちは今こそ、それぞれの日常の中にあって、毎週日曜日の午前10時半から、礼拝のときを一緒に過ごしたいのです。その方法は、ライブ中継を通して、あるいはそのような環境になる方は、教会からお送りしているその日の礼拝のための式文、祈り、日課、説教要旨を用いて、そのほかいろいろ手段方法はちがっていても、同じ時間に同じ神にあって心を一つにされていく。このことが何よりも大切なのではないかと思うのです。／主はその度に私たちに近づき、一緒に歩き、私たちの声に耳を傾け、聖書を教え、食卓についてその主となる、日常の神なのです。この日常の生活の場におられる復活の主イエスの姿がたとえ見えなくても、毎日の生活の中に共におられる主を繰り返して感じ、私たちは今週も安心して生きることができるようです。

(復活節第3主日)

●召天 西○光○さん（3月26日）、○田○子○さん（4月13日）

西○光○さんを天に送る ○野○治
3月末、突然の西○さんの召天の報に接し、深い淋しさに包まれたものです。ひとりの人の人生が締めくくられたとき、様々な弔い方と評価の仕方があるでしょう。しかし、人の目から見て幸せな生涯だったとか、苦難の生涯だったとかいう次元を超えて、神の目から見られているところで、葬儀がなされるのが教会の弔い方があります。亡くなった方を奉ったり、賛えたりするものではありません。召された者を囲みながら、神のまなざしの許で、故人の人生の総決算をするのであります。故人の歩みの中にくつきりと刻み込まれた神のみ業を見て、共に神を賛える礼拝をします。神が故人の人生にどのよう触れてくださり、出



会ってくださり、導いてくださったのか。

西○さんは、それまで築き上げて来られた生活の一切を根こそぎなぎ倒すような苦境の嵐の中で、「教会に行ってみなさい」とある方のことばに押し出されて藤が丘教会の門をたたき、2003年のクリスマスに重富牧師から洗礼を受けておられます。その信仰生活は礼拝中心を貫かれ、礼拝が終わるとすぐ帰路につかれることが多かったのですが、住まいの木曾住宅を越えて町田街道沿いに在るフ○○クさん↓私宅（多摩境）まで、車で送ってくださることが多く、その車中での会話を楽しんでおられました。会話は信仰のこと、教会のこと、ご自分の生活のことが主でした。一人暮らしの長かった西○さんが、心を許して立ち寄ることの多かったのが、フ○○ク宅でありました。西○さんには良い趣味があり、それは旅とカメラでした。旅では一度ならず訪れたフィレンツェとシエナの街のことを熱っぽく語られ、カメラで最も愛していたのが富士山でした。

「パンだけで生きる者は死の予感

で生きる。神の言葉で生きる者は、生命の確信で生きる。」西○さんも、この永遠の命の確信に包まれて旅立ってゆかれたことでしょう。

エ○○ック・フ○○ク

定かではないが、私は初めて西○兄と話したのは、おそらく礼拝後のお茶の時間だった。

誰が誰に先に話をかけたは覚えていないが、その最初の会話的印象的なのは「この教会の会員方は、皆偉い人ばかりで、なかなか話しづらい」と西○さんが言ったことだった。私は「神様の前では、皆は同じだよ」話したら、ホツとしたような表情を見せ「あ、それは良かった」と満足してました。

その後、教会だけではなく、私の家で会っていろいろの話をするようになくなった。私の家の近くに交番があつて、彼が車でその交番を通過するとき、私に「今、交番の前ですよ」と電話を入れてくれた。その電話を受けて、私は外に出て、折りたたみ椅子を用意していつもの様に彼を待つ。来るたびに家の中で話しようよと誘っても、いつも遠慮する。結局

一度も家に入ったことがなかった。そして月に一回ぐらい、2人でファミリレスでランチをするようになった。彼は糖尿病の疾患があるもので、メニューに彼が食べられるものがなく、いつもドリンクバーを飲んでた。それでも彼は付き合ってくれた。

その時の会話だが、2人の典型的なオッサンと同じ様に、まず体の痛みや病気の話から会話が始まる。彼の腰の痛みと私の膝の痛み等、様々の体のダメージのことを細かく話した。意外にストレス発散になり、そのような話が10分〜15分続いたら本題に入る。本題は最初が藤が丘教会の最近の出来事の話だった。最近の礼拝は人が多いか少ないか、なんとなく年寄りの割合が増えた、祝会はどうだったなど決して奥が深い話ではない。

しかし、そのあとは面白い話が始まる。西○さんが若い時、結構外国旅行をしていたようだ。その時の写真を沢山持っていた。彼はその何枚かの写真を必ず持ってきては、説明しながら疑問や質問する。例えば、イギリス、UK、グレートブリテン

は同じ国を指している、また違う国のことを表しているか？ 日本語ではたいていイギリスで片付いていることが多いのだが、実はそれぞれ違う場所を指している。ここでは説明しないが、西〇さんと話す時、このような深い話は珍しくない。お互いに考えさせられてお互いに勉強になった。とても有意義な時間となった。

そして、2年前に私が「癌」と診断されて、それ以来、化学療法や放射線療法の長い戦いが始まった。治療で入院するたびに西〇さんは、必ず見舞いに来てくれた。幸いに暗い話ではなく、いつもの海外についての少し深い話をしてくれた。ある日、「なんでアメリカ、ヨーロッパ、アジアではトイレの言い方が違うのだろう」と西〇さんが聞いてきた。例えば、アジアではWCの略を使ったリ、ヨーロッパでLavatory、またアメリカでrestroomという言い方をする。大した話ではないと思われるかもしれないが、見舞いの話として珍しいがそれと同時に新鮮で楽しいと思った。しかも、副作用がひどくて人にあまり会いたくない時は、彼

はちゃんと分かってくれて遠慮する。前もって電話してくれて、あくまでも私の具合が良ければ病棟まで上がってきて、具合が悪ければ、「お大事に」と言って、車に戻って帰る。こういう場面が何回かあったが、いつも気持ちよく分かってくれた。

そのあと、西〇さん本人が倒れて、私の家の近くの脳神経外科リハビリ専門病院に入院した。妻と2人で何回か見舞いする機会があった。今思えば、入院している姿はなんとなく彼の体が小さく見えて、少し弱っていたような気がした。それでも楽しそうに話してくれて、私のことまで心配してくれた。そういう優しい性格の持ち主だった。

最後に、藤が丘教会で立派な方が大勢いると思うが西〇さんほど謙遜で素直な人はいないかもしれない。「西〇さん、あなたはいいやつ、いい友だった。安らかにお眠り下さい。」

○田〇子さんを偲んで 田〇〇子

○田〇子さんがご召天されたと同じました。心より、ご冥福をお祈りいたします。

○田さんは、19年前に重富先生より受洗した時、私の立ち会いをして下さった方です。聖書研究会でご一緒し、当時、70代でいらっしやうた○田さんは、確固とした信仰に基づいた厳しさと寛容さを兼ね備えられていました。信仰の厚さは、ご結婚される時に、ご主人様に向かって「あなたとお別れしても神様とはお別れしません」と言われたほどです。日曜ごとの礼拝で教会員にお会いできることを何よりの楽しみとし、ご主人様亡き後お一人になられてからは、毎日、駅前のカフェに通うことを日課とされ、私にとつて○田さんは、信徒の模範であり、高齢者の一人暮らしのお手本でありました。気

丈で明るい○田さんでしたが、実のお嬢様と義理のお嬢様を、若くして亡くされた哀しみは深く、それでも「神様一筋」と言われるお姿に、いつも清々しさを感じておりました。

晩年には、老人



ホームに入られ、私も一度しかお訪ねできなかったことは悔やまれますが、キリスト信徒としての生き方を教えて頂いた○田さんに、感謝の気持ちでいっぱいです。

○田さん、大好きな神様のもとで、どうぞ安らかにお眠り下さい。そして、皆さんの「愛」をありがとうございました。

今月の受洗記念日の皆さん

14日 ○田基兄 15日 上〇〇哉兄
17日 ○田〇恵姉 21日 ○藤〇子姉
25日 ○野〇兄 26日 ○谷かな〇姉
31日 ○谷〇葉姉

おめでとうございます。

「御言葉はあなたのごく近くにあり、あなたの口と心にあるのだから、それを行うことができる。」申命記30章14節
藤が丘教会ウェブサイト <https://www.jelc-fujigaoka.org/>
フェイスブックで礼拝のライブ中継をしています。(毎日曜日午前10時半)